論　文　内　容　要　旨

シェーグレン症候群患者における唾液分泌量と精神的健康との関係

神奈川歯科大学　顎顔面外科学講座

非常勤講師　露木　隆之

（指　導：　久保田　英朗　教授）

論　文　内　容　要　旨

シェーグレン症候群(SS)患者における唾液分泌量の減少がSS患者の精神的健康に関与するか否かについて検討した。また、唾液分泌量の減少を伴うSS患者に唾液分泌量促進薬の投与を行い、唾液分泌量を増加させることで、SS患者の精神的健康を改善できるのか否かについても検討した。

対象はセビメリン塩酸塩水和物を52週間投与したSS患者54例である。精神的健康の状態はGHQ30にて評価し、GHQ30スコア7以上を神経症傾向とした。投与開始前および投与開始後は3か月毎に唾液分泌量自覚症状スコア、GHQスコアを測定した。54例中、36例（66.7%）が神経症傾向と考えられた。SS患者のGHQ30スコアと唾液分泌量、自覚症状スコアに相関はみられなかった。 しかし、神経症傾向患者中、セビメリン塩酸塩水和物の投与で唾液分泌量が４mL以上増加した7症例では、 投与開始前後のGHQ30スコア改善率と唾液増加量との間に有意な相関がみられた（R=0.702,P=0.036)。

これらの結果よりSS患者には神経症傾向患者が高率で存在することが明らかになり、その原因に唾液分泌量の減少が関与しているか否かは明らかにすることが出来なかった。しかし、神経症傾向を有する一部のSS患者では十分な唾液分泌量の増加が得られれば、精神的健康の状態も改善できる可能性が示唆された。